

Title	戴震の詩経研究に於ける『爾雅』の意義
Sub Title	The significance of Erya in Dai Zhen' s study of Shijing
Author	種村, 和史(Tanemura, Kazufumi)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1992
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.61, (1992. 3) ,p.98- 119
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00610001-0098">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00610001-0098</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 戴震の詩経研究における『爾雅』の意義

種村和史

### 一

段玉裁、一七三五～一八一五、が彼の師で、清朝考証学が最も高い学的水準に達したといわれる「乾嘉の学」の代表者の一人である戴震、字は東原、一七二三～一八八〇のために編定した「戴東原先生年譜」(以下「年譜」と略称)に拠れば、乾隆十四年己巳、一七四九、戴震二十七歳の条に、『爾雅文字考』というその師の著作について、次のような記事が見られる。

先生に『爾雅文字考』十卷の著述がある。…按ずるに、この書はいつ完成したものかはつきりしない。「その序の、先生が『爾雅』の研究に専心すること」「茲に於いて十年」の言葉に拠るならば、十七歳の時「道を聞く」(『論語』里仁)志を持って以来、訓詁の学に専念し(戴震の乾隆四十二年丁酉正月十四日付、段玉裁宛手翰に拠る言葉)て、ついにこの著作をものしたのは恐らく乾隆十三、十四、十五年の間にあろう。「序に」「姑くこれを異日に俟たん」とあり、これは「この書に」満足しきれない点があるという気持を表わす言葉なのであるが、先生の小学の分野に

おける基礎はこの『爾雅文字考』によって打ち立てられたのである。

同じく段玉裁の編んだ『戴東原集』(以下『戴集』と略称)巻三に収められた「爾雅文字考序」という文の中に、この書は彼の『爾雅』研究の過程において、「偶々記する所有り、過ぐれば旋で忘るるを懼れて之を録して帙を成」したものであると言っているのを見れば、あるいは劄記の体裁をとった著述であったとも考えられる。いずれにしても、段玉裁が「年譜」中で、戴震の詁訓の学はこの書と『方言疏證』とがなお存するおかげで、「亦た稍涯略を窺ふ可し」と言うのを見ても、邵晋涵の『爾雅正義』、郝懿行の『爾雅義疏』に先立つ、清朝『爾雅』学の白眉となり得る内容を持ったものであったに違いない。しかし、この書は今に伝わらない。「年譜」に拠れば、『爾雅文字考』の稿本は、もと曲阜の孔継涵の家に蔵されていたのを、戴震の同年で山東布政使にまで登った呉夔濤、名は俊、の子、慈鶴が継涵の長子広根から借り出して刊刻しようとした由であるが、結局刊行がなされなかったばかりか稿本の所在もわからないことになってしまったのである。その事は措き、この著述の事実によって、戴震が『爾雅』の研究に若年の折からいそしんでいたことがわかる。

そもそも清朝考証学が、その経学研究において詁や文字の研究——いわゆる「小学」——を重視し、その方面に優れた業績を残す後漢の学問を大きな拠り所としたために「漢学」という名で呼ばれている事実から考えても、十三経の列に入れられていわば小学の經典の扱いを受けている『爾雅』を、漢学の諸家がいかにとらえ、その学問に取り入れていったかは、興味深い問題となる。とりわけ、それが古に近きが故に漢代の詁訓学を尊崇したといわれる惠棟、一六九七—一七五八、に対して、それが經典の真意をより正しくとらえているという理由で故訓を重視し、しかももし経の意

にはずれていると考えられる場合には、大胆に批判することもためらわれない戴震の学問を考える際には、なおさら彼が『爾雅』をどう扱ったかは大きな問題となる。『乾嘉の学』の中で特に方法論の確立に功のあった戴震であれば、これは、広く清朝考証学が故訓をどのように利用していったかという問題につながり得る可能性を持っている。その意味で彼の『爾雅』に関する研究をまとめたという本書の亡逸は惜しまれることなのである。

それでは、我々にはこの問題を考える手掛りが全く失われてしまったかと言えそうではない。彼が残した〈經〉の考証に関する著作の中に『爾雅』の故訓がどのように反映しているかを抽出していけば、この問題に対する解答は求められるはずである。

筆者は、戴震の詩経研究の成果である二つの著述、『毛鄭詩考正』<sup>(3)</sup>（「年譜」ではこの書を『詩補伝』と同一のものとする。そうであるならば乾隆十八年癸酉、一七五三、戴震三十一歳の作。以下『考正』と略称）と『杲溪詩経補注』<sup>(4)</sup>（「年譜」に拠れば、乾隆三十一年丙戌、一七六六、戴震四十四歳の作。以下『補注』と略称）の中に彼の経学の理念と方法論がいかに表出しているかの調査を試みて来たが、その過程で、彼の詩経研究には『爾雅』の馭使が核心をなしていること、また彼によって『爾雅』が清朝の学問の中で大きくクローズアップされたことを知った。

そこで、本論文においてはそのことを具体的に分析し、あわせて、彼が故訓についてどのような認識をもち、その学問に吸収していったかという問題に迫りたいと思う。

なお、論文中の引用は、訳文か書き下し文のみを掲げ、特に必要と思われる箇所を除いて原文は省略する。引用文中、(一)で原文に付せられた戴氏の自注を、(二)で筆者の補足した説明を、(三)で翻訳上、必要と思われる補充語句を表した。

上に述べた問題を見る上でまず明らかにしなければならないことがある。それは、『詩経』の最古の注解で、前漢の毛亨あるいは毛萇の撰になる『毛詩詁訓伝』（略して毛伝）と『爾雅』との成立の前後関係、すなわち詁訓の継承関係について、戴震がどのような認識を持っていたかということである。両者の関係については従来様々な説が行われ、『爾雅』という文献の価値もそれによって大きく揺れ動いてきたのである。

この問題に関して、『戴集』巻三「江慎修先生に答えて小學を論ずる書」では次のように言う。

今残る限りの古典の注釈の中で毛伝より古いものはありませんが、その毛伝も作られたのは『爾雅』より後のことです。…以前の学者が『爾雅』の詁訓は往々にして毛伝から取られている」と言うのは誤りです。

同様の説は「爾雅文字考序」にも、「古の故訓の書、其の傳はれる者、爾雅に先んずるは莫し」と、より端的な形で現れ、召南「甘棠」の『補注』でも繰り返されている。

彼が非とする「以前の学者」とは、漢唐の詩経学に反対した宋儒、歐陽脩・葉夢得・朱熹等を指している。<sup>(5)</sup> 彼らの説の要点は四点にまとめられよう。それは、

一、『爾雅』は漢代に成ったものである。

二、『爾雅』は主に『詩』の故訓を纂集して成ったものである。

三、『爾雅』が拠った故訓は主に毛伝である。

四、従って『爾雅』に拠って毛伝鄭箋の失を補おうとした先人の努力は無意味である。

四で批判の対象となっているのは主に、『毛詩正義』（以下、正義と略称）を撰述した唐の孔穎達であろうが、周南関雎詁訓伝第一の題下の正義を見ると、彼は、

毛氏の考えでは、『爾雅』が作られたのは、ほとんど『詩経』を解釈するためであった。そしてその中に「釈詁」篇「釈訓」篇がある。というわけで、『爾雅』の詁訓に依拠して、『詩経』のために「伝」を作りあげた。

と言ひ、毛伝が『爾雅』の詁訓に拠ったという説を明確に述べている。この説の根拠は先儒の発言である。つまり鄭玄が『駁五經異義』で「玄の聞けるや、爾雅は孔子の門人の作る所にして以て六藝の言を釋すと。蓋し誤まらざるなり」と言ひ、魏の張揖が「廣雅を上る表」に「臣聞くならず、昔在周公、唐虞を續述し文武を宗翼し、…六年にして禮を制して以て天下を導き、爾雅一篇を著して以て其の意義を釋す、と」あるいは「今俗に傳ふる所の三篇の爾雅、或は仲尼の増す所と言ひ、或は子夏の益す所と言ひ、或は叔孫通の補ふ所と言ひ、或は邠郡梁文の考ふる所と言ふ」と言ひ、『爾雅』の成立をはるか昔に設定しているのを根拠にしていると考えられる。この立場に立つならば、毛伝鄭箋を疏通することを使命とする正義が、伝箋の詁訓を『爾雅』に徴して証明することが必須の手續きとなることは自明である。宋儒の批判は、一に『爾雅』の成立に関する考え方の違いから導かれたものである。

歐陽脩は『詩本義』を著し、朱熹は『詩集伝』を著して、毛伝鄭箋を自由に批判する立場をとることによって、詩経

学の新たな局面を導いた人物である。その彼らが『爾雅』の權威を打破する発言を行っているのは、方法的に必須の手続きであったと言えるだろう。つまり、既存の訓詁学の軀から逃れ、独自の説を立てるにあたって、古注の抛り所であった『爾雅』を予め無力化しておく必要があったと考えられるのである。

宋儒が形成した『爾雅』観は、『詩集伝』の盛行に伴って、清朝まで影響を及ぼした。戴震と同時代の学者の手に成る『四庫全書総目』経部小学類の「爾雅注疏十四卷」の提要は、この派の説を最も精密な形で展開し、戴震の『爾雅』観と対峙する。

このように見てくると、戴説は宋儒の説を批判し、正義の説に復帰していることがわかる。これは、考証学が一般に宋学から脱脚し漢学を指向することと対応している。戴説の根拠は大きく言って二つ考えられる。第一は師承があったと考えられる漢魏の大儒の前掲の発言である。第二は、毛伝の訓詁の具体例である。それは一見奇妙な論理ではあるが、毛伝が『爾雅』の訓詁を誤用していると考えられる例によって二書の関係を決定できるとするのである。例えば、召南「甘棠」の詩について毛伝が「甘棠は杜なり」と言うのに対し、戴震は、これは『爾雅』枳木の「杜の甘なるは、棠（杜甘棠）」を誤読したものだとの論断を下す（『補注』）。その上で双行注に、「此を用つて毛詩の詁訓は爾雅に據依して之を為れるを知る」と結論づける。また、「江慎修先生に答えて小學を論ずる書」でも同じ例を上げた後で「この他、毛伝が『爾雅』を誤用した例ははなはだ多い。先儒が『爾雅』には往々にして毛伝の訓詁が取られていると言うのは誤りである」と言う。

戴震は以上の二条の根拠から『爾雅』が毛伝に先行する著作であると考えているとすることができ、ここで注意しなければならないのは、戴震は、根拠の一として述べた先人の説の中で、ただ『爾雅』が毛伝に先行するという点のみ

に従い、『爾雅』の作者を周公、孔子、孔門弟子等に仮託する点はとらないということである。召南の「草蟲」と「甘棠」の『補注』及びその双行注に、『爾雅』は、周秦の際に『詩経』『書経』を解釈した故訓を記したものであるとのみ言う。つまり彼は、聖人やその周辺の人々の作という權威を付与することによって、『爾雅』を絶対的な地位に祭り上げようとはしないのである。戴震のこの認識は、清代においては、特異なものである。なぜならば、彼以外の学者、恵棟<sup>(7)</sup>、錢大昕<sup>(8)</sup>、邵晋涵<sup>(9)</sup>、王念孫<sup>(10)</sup>らはいずれも、『爾雅』を周公の作、孔子および孔門子弟の増補になるものとする説をとっているからである。『爾雅』を十三経の一と見る立場からすれば、彼らの考えの方がより正統的と言えるであろう。この意味で、作者を聖人に求めない戴説は、宋儒の見解がなお残入している過渡的なものだという見方さえ成り立つ。しかし、あるいは過渡的であるかも知れない立場をとることによって、彼は結果的には前記の人々よりも自由にそして徹底的に『爾雅』の可能性を追究できることになった。これについては次章で考察する。

### 三

戴震の詩経研究に関する著作には、前述の如く、『毛鄭詩考正』と『臬溪詩経補注』の二書があり、殊に後者において、整然とした体例のもとに彼の詩経学の到達点が結晶した形でまとめられている。我々はこの二書に拠って、戴震が前章で明らかにした立場に立ちつつ、実際の研究の中に『爾雅』をどのように役立てていったかを見ることができ。

『考正』『補注』の、体例あるいは方法論は、それ自体、興味深く複雑な問題であり、稿を改めて論じる必要があるが、今この書の基本的人格を簡単に言えば以下のようである。

①「詩三百、一言以て之を蔽<sup>おほ</sup>へば、曰く、思<sup>よじ</sup>邪<sup>ま</sup>無し」(『論語』為政)という孔子の言によって詩経全体の解釈を貫こ

うとする。従つて古注が重視する『毛詩』の小序に拘泥しない。

②詩の解釈に當つてはまず字義の闡明から出発する。毛伝鄭箋、朱熹の『集伝』を始めとする先人の解釈を批判的に継承しつつ、それを乗り越えて、詩經人の心に迫ろうとする。

③『詩經』を一つの統一体として見、字義の訓詁も『詩經』全体でできるかぎり統一しようとする。

このような意識で成された詩經研究における『爾雅』の役割を検討していくと、まず次の二点が目につく。

一、『爾雅』によつて伝箋の訓詁を証す。

二、『爾雅』によつて伝箋の漏らした字句の訓詁を加える。

この二つは、基本的に孔穎達の正義の方法を受け継いだものである。前章で触れたように、正義においても『爾雅』は豊富に利用されていて、その点では戴震の詩經研究と遜色ないのであるが、『爾雅』を用いて何をどのように論証するかという目的意識は両者に明確な違いが認められる。孔穎達には、毛公は『爾雅』の説を襲つて伝を撰したという認識があった。ところで、正義の作られた意図は毛伝と、「毛の意を表明し、其の事を記識し」（周南関雉詁訓伝第一、「鄭氏箋」の正義）た鄭玄の箋の意を「疏通」することにあった。したがつて、正義に『爾雅』を引用するのはひとえに毛伝鄭箋の説を論証し補強するためであり、それ以外の任務を『爾雅』に負わせることは原則としてあり得ず、もし、『爾雅』と毛鄭の訓詁に齟齬が見られる場合は、両説を何とか融合させようという努力がなされることになる。

戴震の詩經研究の態度はそれとは異なる。『戴集』卷十「毛詩補傳序」に「先儒の詩を為むる者、漢の毛鄭、宋の朱子より明らかなるは莫し」とその価値は認めるものの、自己の『詩』研究の立場を「今全詩に就きて其の字義名物を各章の下に考へ、作詩の意を以て其の説を衍べず。蓋し字義名物は、前人の或いは之を失へる者、以て詳覈して知るべ

し。古籍具さに在れば明證有るなり」と述べ、『詩』の字義の追求によって、伝箋、集伝等の先人の業績を越え得るとする立場を高らかに掲げた彼であれば、『爾雅』にもその意図を達成する手段としての役割が与えられていることは予想できよう。両者の姿勢の違いを端的に表わすものとして、周南「關雎」の「左右に之を芼す」の「芼」の字の訓詁を例に挙げよう。

この字について、毛伝が「芼は擇ぶなり」と言うのに対し、『爾雅』釈言には「芼は擻なり」という訓詁が見える。この矛盾を正義は次のように説明する。

「『爾雅』釈言に見える」「擻」とは、引き抜くという意味である。「芼」は引き抜くと解され、しかも「關雎」の詩では「之れを芼ぶ」と言う。故に、「この場合の「芼」は」菜を引き抜きそれを選ぶという意味であることがわかる。

ここには毛伝と『爾雅』とを折衷しようという正義の態度が現れている。これに対し、同じ字についての戴震『補注』の説明のしかたを見ると、まず、『爾雅』と『毛伝』、および『集伝』の「芼は熟て之を薦むるなり」との三説を提示し、それぞれの訓解の生まれた所以を推測した上で「三説皆な辭に縁りて訓を生ず、字の偏旁に於いて明らかにする能はず」と斥ける。かと言って『説文』一下艸部の「芼は艸、覆蔓す」という解も詩篇の構成を無視したもので承服し難く、「經を説く者」、「字を説く者」それぞれに得失があると經学の困難さを指摘して、その後には次のような自説を展開する。『周礼』天官醢人、『儀礼』公食大夫礼、『礼記』内則他に見える用例から、「芼」は「羹、醢、菹、芼」の四物

の一つで、肉汁で菜を煮込んだ料理のことで、「之を莖す」とは儀式に際して「匏」という容器に盛るためにこの料理を作ることであると言うのである。ここには、『爾雅』と毛伝を疏通させようという態度はないばかりか、『爾雅』の訓詁にさえも相対的な価値しか認めていないことを見ることができる。そして、戴震の詩経解釈の根幹をなす姿勢は個別の故訓に絶対的に依拠するのではなく、經典自体の内在的な論理を発見する——ここでは礼と詩とのつながりを考える——ことにあり、故訓にはそれを手助けする役割が与えられているにすぎないのではないかとこの仮説も立てられよう。ここに、正義と戴震との決定的な違いが現れており、この意味で先の『爾雅』によって毛伝を証し補うという方法は戴震にとってそれほど重要なものではないことがわかる。戴震独自の方法論を考えるならば、先に挙げた二つに続いて次の三つが重視されるべきである。

三、『爾雅』によって伝箋などの説を批判する。

四、『爾雅』によって伝箋の字句の伝写の誤りを指摘する。

五、『爾雅』によって経文の伝写の誤りを指摘する。

以下、これらの諸条について、事例に則して説明していこう。

周南「關雎」の「求之不得、寤寐思服、悠哉悠哉、輾轉反側」について、毛伝は「悠は思ふなり」と言う。これに対して戴震は『補注』で『爾雅』釈詁の「悠は遠なり」に拠って毛伝の訓詁に反対する。ただし、『爾雅』釈詁には「悠は思ふなり」という訓詁が見られるので、一概に毛伝を臆断として斥けることはできない。しかし、『詩経』における他の用例を見ていくと、毛伝も周頌の「訪落」の篇の「於乎悠<sup>あ</sup>なる哉、朕<sup>われ</sup>未だ艾<sup>あ</sup>ぶことあらず」では「悠は遠なり」と解し、邶風「載馳」の篇の「馬を驅ること悠悠」では「悠悠は遠なる貌」と解している。『詩経』の字義を一貫させる

戴震の立場からすれば、「關雎」における訓詁もそれらと統一すべきであり、毛伝には従うことができないのである。

これとは逆の例として、「關雎」の同じ章について、鄭箋は「服は事なり」という解を与える。箋を正義によって敷衍すると、「寤寐に服を思ふ」とは、この詩の主人公である后妃が、夫君の後宮に入れるために淑女を求めるところを自分の仕事と考え、その仕事を寝ても覚ても思案しているという意になる。鄭箋は、『爾雅』積詁に「服は事なり」とあるのに拠って、かえって毛伝に「服は之を思ふなり」とあるのには従わないものである。これに対して、『補注』は「〈思服〉とは、『魏の』王肅が『之を服膺思念す』と解すのが正しい」と言って、『爾雅』に拠った鄭説を斥けて、結果的に毛伝を是としている。以上の二点は、『爾雅』と毛伝に対する戴震の対極的な二つの態度を示すが、その説に従えば「關雎」のこの章は「之を求めて得ず、寤寐に思ひ服ふ、悠かなるかな悠かなるかな、輾轉反側す」と訓じることになる。

豳風「東山」の「蝟蝟者蠋、烝在桑野」に毛伝は「烝は賓なり」と言い、鄭箋はこれを補って「古の声は、賓、填、塵、同じきなり」と言う。この説を正義に拠って解くと、「賓」は古くは「填」「塵」と同音で互いに通用した。そこで『爾雅』釋詁の「塵は久なり」という訓詁を用いて「賓」を「久」の意とし、毛伝の言わんとする所は「烝とは久しいという意である」とであると考えられる。

これに対し戴震は『考正』で「烝」の意味は『爾雅』積詁に「烝は衆なり」とあるのに従い、毛鄭の説を駁している。『考正』は、戴氏遺書本・経解本ともに「爾雅烝衆也」に作るが、『爾雅』諸本に拠って「烝」を「烝」に改める。これも、大雅「烝民」の「天、烝民を生む」では、毛伝が「烝は衆なり」と言うので、それに従うことにより『詩経』全体の訓詁を一貫させる事ができる。こうしてこの詩句は「蝟蝟たるは蠋、烝くして桑野に在り」と訓じることにな

る。

また前章で、毛伝が『爾雅』に従ったと考える根拠の一つとして、毛伝が『爾雅』を読み誤ったと見られる召南「甘棠」の例を挙げたが、これもここで扱えば『爾雅』に拠って毛伝の誤りを正した例の一つということになる。

このように、毛伝鄭箋の説に従い難い場合、戴震は『爾雅』によって反駁を加える。その場合、『爾雅』のみを孤證とするのでなく、他の詩に見える用例と訓詁を一貫させる努力をしていることがその説を注意深く分析することによってわかる。

次に、古典研究の領域においては本文批判の問題が必然的に関わってくるが、戴震はこの問題についても『爾雅』を有力な資料とする。

周南「卷耳」の「彼の崔嵬さいがいに陟のぼり、我が馬虺かい墮たいたり」について毛伝は「崔嵬は土山、石を戴いたける者なり」と言い、同じ詩の「彼の砢しよに陟のぼり、我が馬瘖やみぬ」については、「石山、土を戴けるを砢と曰ふ」と言う。ところが、『爾雅』積山はこれと正反対の訓詁を載せる。「崔嵬」については「石の土を戴ける、之を崔嵬と謂ふ（石戴土謂之崔嵬）」と言い、「砢」については「土の石を戴けるを砢と爲す（土戴石爲砢）」と言うのである。この矛盾に対して、戴震は『補注』において、「毛伝は伝写において誤ったものであろう」とし、それを補強するために「砢」に双行注を付し、「砢の字は石を部首にしている。それは石が山の上に現れているからである」と説明する。この説は、古くは正義に「〔毛傳〕爾雅と正に反するは或は傳寫の誤れるなり」とあいまいな形で言及されている。戴説はこれを承け、傍証を加えたものと位置づけられる。

これは毛伝の伝写の誤りを指摘したものであるが、同様の方法を用いて戴震は経文の校訂をも企図する。「卷耳」の

「我が僕痛みぬ、云に何ぞ吁ふる」では、毛伝に「吁は憂なり」と言うのに対し、戴震は次のような議論を展開する。

「吁」は「盱」に改めるべきである。小雅「何人斯」に、「壹たびは之れ来たれ、云に何ぞ其れ盱ふる」と言い、小雅「都人士」に、「我見ずんば、云に何ぞ盱ふる」と言うが、どちらも「思う人に」あうことができなくて遠く眺めやる意である(『説文』四上、目部に「盱は目を張るなり」とある)。『爾雅』釈詁に「盱は憂なり」と言うのに、毛伝が「何人斯」と「都人士」の「盱」の字に訓詁を加えていないのは、どちらも「卷耳」の「吁は憂なり」という訓詁を受けているからなのである。「そこから考えると」今、この本詩及び毛伝が「吁」に作っているのは後人の伝写の誤りで「実は「盱」に作るべきで」ある。

この議論には戴震の毛伝に対する二つの信念が反映されていると考えられる。一つは、毛伝は一書全体で完結した訓詁の円環を形成する整合的な構成を持った著作であること。二つ目は、毛伝は外廓に常に『爾雅』という存在を伴っていること、である。したがって毛伝の内部に不整合が見られた場合、それは流伝の過程において起こった誤りと見ることができ、『爾雅』を参照することによって復元することが可能となるのである。この二つの信念は前述の例にも共通して見られることであり、戴震が自己の詩経学を推進していく上で中心的な原動力となっていると考えられる。

#### 四

前章では、戴震が『爾雅』を縦横に利用して毛鄭を越える説を展開する様子を見てきたが、ここで彼が『爾雅』を重

視する根拠を改めて問題にしよう。もちろん、二で考察したように、彼が毛伝は『爾雅』の訓詁に拠って作られたものと考えたのが大きな根拠になることは言うまでもない。しかし、それに加えて、彼が『爾雅』の經学における価値をいかに考えていたかを明らかにする必要がある。この問題について戴震は、『戴集』卷三の、任大椿の族弟、任基振、字は領従のために書いた「爾雅注疏箋補序」で次のように言う。

爾雅は六經の通釋なり。爾雅を援きて經に附し、而して經明らかかに、爾雅を證するに經を以てし、而して爾雅明らかなり。然れども義爾雅に具はりて、而も其の經を得ざる或り。殆し爾雅の作らるるや、其の時經未だ殘闕せざる歟。

文中、「爾雅は六經の通釋」という思考は、前掲鄭玄の「駁五經異義」の「〔爾雅は〕以て六藝の言を釋す」や、郭璞の「爾雅序」の「夫れ爾雅は九流の津涉、六藝の鈴鍵」等に基づき、『爾雅』は六經がまだ完全な姿をしていたうちに成立していたという推測とともに、この文献に拠って毛伝よりも正しい訓詁を考えようとする戴震の方法に理念的な根拠を与えるものである。『爾雅』は毛伝に先行するから価値があるというだけでなく、それ自体が六經の正しい訓詁を伝えているから尊重さるべきなのである。この認識に基づいて、彼は『爾雅』を出発点として經の真意に迫る訓詁学の階梯を構想する。そのことは「爾雅文字考序」に見える。

『爾雅』を引いて『詩』『書』を釈し、『詩』『書』に拠って『爾雅』を証する。そこから進んで、先秦以前のすべ

ての現存する古籍にあまねく及んで、それらを総合し考核し、一つの条理のもとに貫いて、また「その訓詁」を六書・音韻の法則に基づけたならば、故訓の根源の所に鞏固な位置を占め、訓詁の学のために為す所有りと言い得るであらう。

彼の構想する訓詁学は、まず『詩』『書』を『爾雅』に拠つて研究することから始まる。つまり、『考正』『補注』は、全ての先秦の古籍を一貫した訓詁の下に貫く学問の最初の実践だったのである。

一方、『詩』と並行して考えられている『書』の研究の結果を考えると、『尚書義攷』二巻という著作が浮かび上がる。これは、彼の遺著として『聚學軒叢書』に刊入されたものであるが、その義例に「惟だ尚書には漢儒の全注無し。今經文の下、即ち爾雅を取りて以て古義を存す」と有り、この著作の意図は、『爾雅』の故訓を以て一貫して『尚書』を解くことを試みようとするところにある<sup>(12)</sup>とすることが出来る。ここに、戴震の構想した訓詁学の初歩的な成果は、二つの專著として結実しているのである。

また、さきの戴震の発言の中で、『爾雅』を群經に拠つて明らかにするという方向が考えられていることにも注目せねばならない。この発言が、前章の「荦」の訓詁で触れたように、彼は『爾雅』の説を検証する際、他經の用例を調べていく方法をしばしばとっていること、の根拠とすることが出来るからである。戴震には、「一字の義、當に羣經を貫き、六書に本づきて、然る後に定まれりと爲すべし」(『戴集』卷九「是仲明に与へて學を論ずる書」)という発言からも窺えるように、六經の訓詁は一貫し得る、換言すれば、六經はそれ自体で完結した字義の円環を形成しているという認識があった。そして、その訓詁の円環をすくい取る網の役割をしているのが「六經の通釈」である『爾雅』で

ある。従って、『詩』の訓詁は、常に他の經の用例をも勘案しなければならず、またそれによって『爾雅』の失——これについては次章で見てゆく——を克服することもできるわけである。

更に「爾雅文字考序」及び「是仲明に与えて学を論ずる書」の中で六經の字義を『爾雅』に拠り、互いの用例に拠り一貫させることで満足するのではなく、その訓詁が六書・音韻の法則と合致するかどうかの検証を経て、初めて定詁とし得ると述べていることに注目したい。ここに至って、戴震の訓詁学は、故訓や用例などの枷からも脱し、ほとんど科学的真理に似た境地に至るのである。この段階においては、「六書」についての最大の依拠たり得る『説文解字』に目を向けざるを得ない。しかし、『爾雅』より遙かに後代の作であるこの書に『爾雅』を越える説を期待することができらるであらうか。この疑問に彼は「江慎修先生に答へて小学を論ずる書」の中で答える。

『説文解字』は『爾雅』『毛伝』と比べるならばもとより最も後に成ったもので、二書に基づいた所も多いけれども、要するに三書にはそれぞれ師承があります。(『爾雅』の訓詁が師承を失ったもので、逆に『説文』の解釈が正しい師伝に基づいたものである例は枚挙に暇がない——筆者戴説を要約)これによって漢人の著書は一書の中に、師承があり拠るべき説と、伝を失って牽強付会をなした説とがあることがわかります。

師承の問題を考えることによって、故訓は相互に補完し合うと考えるのである。同じ文中に、「説文は字體・字訓に於いては罅漏免れざれども、其の六書を論ずるは、則ち師承を失はず」と言うのを見ても、彼が『説文』にかなりの信頼を置き、六書に関する基本的依拠としていたことがわかる。<sup>(13)</sup>

この段階においては、『爾雅』はピラミッドの頂上、円環の中心としてではなく、六経、故訓、六書、音韻が互いに形成しあう神経組織のシナプス（接合部）の一つとして考えられることになる。戴震は宋儒の説に反対し、『爾雅』に大きな価値を見出し、自己の経学の中で、明確な方法論を立てて縦横に利用したのであったが、実は、彼の構想する規模の大きい訓詁の学においては、『爾雅』は相対的な価値を持って存在させられ、常に他の文献と関係づけて考えられていることが明らかになった。ここに戴震の冷徹な認識を見ることができ、次章で、更に『爾雅』の価値に対する彼の考え方を追究してみよう。

## 五

戴震は、『爾雅』を経学にとつての重要な文献と考えたのであるが、かと言って『爾雅』に過度に依拠したわけではなく、この書を持つ限界をも明確に認識していた。このことは前章の結論からも推測できることであるが、実際の詩経研究において、この認識がどのように反映しているかを見ていこう。

『爾雅』の詩経研究における限界は、一つには『爾雅』流伝の過程で訛伝が生じたことによる。そのため、慎重な校勘作業によってよりよいテキストを復元しなければには依拠し難いわけである。『考正』の中にも『爾雅』の文字の誤りを『説文』によって改めた例があり（擲風「新臺」、戴震も『爾雅』校訂の試みは部分的には行っていたことがわかるが、この作業の大成は邵晋涵の『正義』、郝懿行の『義疏』、および阮元の『爾雅校勘記』等の業績に俟つことになる。

『爾雅』を詩経研究の絶対的な依拠とはし難いと戴震が考える理由には、この他に『爾雅』自身に非学問的な性格が

混在しているとの認識がある。召南「草蟲」の「補注」に次のように言う。

『爾雅』は周秦の際にできたものであるが『詩』『書』『訓詁』を解釈するのに、往々「辭に縁りて訓を生じ」（辭の意義が展転して遂に本義を失うこと）<sup>(14)</sup> た所がある。「爾雅」の説の「すべてが詩義を証し得るものと思つてしまふと、經の意をとらえそこなうことになる。

この認識は孔穎達には見られないものであるし、戴震以後に『爾雅』を研究した考証学者達にも稀薄なものであった。これは、『爾雅』成立に関する彼の醒めた認識に由来しよう。二で見たように『爾雅』の作者を聖人、及びその周辺人物に求めなかつたことが、『爾雅』の權威を過度に認めない右のような冷静な見方を導く原動力となつたのである。『爾雅』の非学問的性格を具体的に指摘した例は召南「甘棠」の『補注』の双行注に見える。例えば、『爾雅』釈詁に「台・朕・賚・界・ト・陽は予なり」とあるのは、「予」に二つの異なつた意義があるのに、それぞれの同義語を同じ条に並べているもので体例として問題がある。すなわち、「台、朕、陽」は第一人称を表わす「予」の同義語であり、「賚、界、ト」は物を「予」<sup>あた</sup>えるといふ意味の同義語なので本来は区別しなければならぬのである。また例えは、釈詁に衛風「淇澳」の「如切如磋」、「如琢如磨」以下の句の解釈を『礼記』大学の「学を道ふなり」、「自ら脩むるなり」などに従っているのは、「大学」の引用は「断章取義」で詩本来の意義に則したものでないので、ふさわしくないのである。

このように戴震は『爾雅』の限界を認識し、『爾雅』が抛り難く、逆に「伝」「箋」「説文」などの後出の書に師承を

受けた正しい説があると考えられる場合、『爾雅』を駁して、後出の書に従うのをためらわないのである。ここに故訓の書の「古」なるを貴しとしたのではなく、「正」しさを求め、師承を有した拠るべき説である限り、何の書であれ同様に扱った戴震の学的態度を見ることが出来る。それでは彼が数ある説の正否を判断する基準とは何であらうか。その一つは、前章で見た様にある訓詁が六書・音韻の法則に合致しているかどうかという検証であらう。しかしそれについての調査は別の機会に俟つ。ここでは、彼の詩経研究を通じて顕著な、一字の訓詁を一篇の詩あるいは『詩経』全体の中に置いて考える方法について見てみたい。この方法は「是仲明に与えて学を論ずる書」で「一字の義、當に羣經を貫き」云々と是仲明に教えている方法であり、前述の例においても何度か触れてきたことであるが、更に周南「螽斯」及び召南「草蟲」の昆虫名の考証の例を挙げよう。

「螽斯」の詩中の「螽斯の羽」について、毛伝は「螽斯は蝻蟴なり」と言い、豳風「七月」の「五月斯螽股を動かす」と歌われているのと同じの昆虫であるとする。また、「草蟲」の詩中の「啜啜たる草蟲、趨趨たる阜螽」について毛伝は「草蟲は常羊なり」、「阜螽は蟻なり」と言う。以上の説は皆、『爾雅』積蟲の「阜螽は蟻、草蟲は負蟻、蜚螽は蝻蟴なり」に基づいたものである。『詩』及び毛伝の「螽斯」が積蟲の「蜚螽」に、「草蟲」が「阜螽」に、「阜螽」が「阜螽」にあたる。故に敦璞は「草蟲は負蟻」の注に「啜啜たる草蟲」の詩と毛伝を引用する。「螽」は積蟲に「螽の醜いは奮ふ」と見え、以上三つの昆虫は「螽」に類するものと考えられるわけである。

これについて戴震は「螽斯（あるいは斯螽）」の語構造は小雅「小弁」に見える「螽斯」、小雅「斯干」に見える「斯干」と同じで、「斯」の字はいずれも、「螽斯」について『釈文』が「一に云ふ、斯は語なり」と言うように、語助詞にすぎないとする。また、「阜螽」の「阜」の字は秦風「小戎」その他に「四牡孔だ阜いなり」と言い、あるいは小雅

「駟騫はなは」に「駟騫孔だ阜おほいなり」と言い、その毛伝に「阜は大なり」と見えるのと同義で、単なる修飾語に過ぎないとする。こうして彼は、両詩に歌われた昆虫は蝨、すなわち草の中をとび跳ねる昆虫のことに他ならず、ことさら二種の昆虫に分ける説を斥ける。これは一字の訓詁を経全体に一貫させる態度と言えよう。<sup>(16)</sup>

次に、「草蟲」の考証においては彼は詩の構成を考える。「啜啜」は蟲の鳴き声を表わす擬声語であるので「啜啜たる草蟲」の句においては、詩人はまだ虫の姿を見ていないのである。それに続く「趨趨たる阜おほいなる蝨」の「趨趨」とは虫のとび跳ねる擬態語で詩人が実際に虫を目にしているので「蝨」という昆虫名を出しているのである。そこから推論して、姿の見えず鳴き声も一様でないであろう虫の名を限定し得るはずはないので、「草蟲」は「蝨」より広い範疇で、草中にすむ小昆虫一般を指す普通名詞であると結論づける。これは詩篇の流れについての把握を基盤として、そこから一字の意義を考えるものである。

## 六

以上検討してきたように、戴震の詩経研究においてはまず経自体の合理性と一貫性に対する彼の信頼を基盤とした字義の把握がまずあり、それに拠る検証に耐え得る故訓のみが採用されたと考えることができ。つまり彼の経学及び訓詁学は、戴震の個性——文学的感性——に基づく批判精神が前面に出た独創的なものであり、一般に清朝考証学全体に対して考えられている、故訓を遵守し、感性を排した禁欲的な字義解釈によって〈経〉を読んでいくという静謐なイメージとは異なる、柔軟で能動的な一面をもったものであることがわかる。そして、戴震は『爾雅』という故訓の書を再評価し尊重したのであるが、その際、あくまで〈経〉についての自己の把握に基づき批判的検証を行った後に研究に利

用するという理性的な態度を守った。ここに彼の經学における『爾雅』、ひいては故訓の持つ意義を見ることができると考えられる。これは彼の經学の性格を考察する上でも重要なポイントとなるであろう。

注

- (1) 『安徽叢書』第六期(一九三六)『戴東原先生全集』附印。筆者は同書の縮印本(一九八七、台湾、大化書局)を用いた。
- (2) 『安徽叢書』用鎮海張氏校本景印。
- (3) 『安徽叢書』用孔氏微波榭叢書本景印。他に『皇清經解本』あり。
- (4) 同右。
- (5) 彼らの説については、清、謝啓昆、『小学考』卷三「爾雅を見るのが簡便である。その説の分析については、『爾雅導読』(顧廷龍・王世偉、一九九〇、中国、巴蜀書社)上編第一章第二節など專論が多い。
- (6) 『詩』王風「黍離」正義、『周禮』春官大宗伯正義に引く。
- (7) 錢大昕撰「惠先生稊傳」(『潛研堂文集』卷三九)に「其の爾雅を論じて曰く、釋詁・釋訓は乃ち周公作りて以て成王に教ふる所なり。」
- (8) 『潛研堂文集』卷十「答問七」に「陽湖の孫季仇(星衍、字は季述のことか)謂へらく、 $\text{へ}$ 其の實、『爾雅』十九篇中、皆周公の正文有り、釋詁一篇、後儒の増入する無きに非ず」と。斯れ篤論爲り。」
- (9) 『爾雅正義』「爾雅序」題下の正義参照。
- (10) 『廣雅疏證』序に「昔者周公禮を制し樂を作り、爰に爾雅を著す。其の後七十子の徒、漢初綴學の士、法遞ひに補益有り。」他に「上廣雅表」の疏證も参照。
- (11) 『安徽叢書』本に景印される。
- (12) 近藤光男「戴震の經學」(『清朝考證學の研究』へ一九八七、東京、研文出版)三四頁)
- (13) 「古今音聲の書」つまり古の音韻の書は残らないので、戴震自身がその欠を補おうと一書を著したのが『転語二十章』であるとその序に言う(『戴集』卷四)。この書は伝わらないが、『声類考』、『声韻考』がその発展したものと云われる。

(14) 狩野直喜『中国哲学史』(一九五三、岩波)六一三—四一二、五六七頁に拠る。

(15) 『釈文』に「甄、本又、甄に作る。詩、斯に作る、同音なり。私支の反」と言う。

(16) 胡承珙『毛詩後箋』周南「螽斯」に拠れば、この説は宋の敞祭の『詩緝』が始めて提出したものであると言う。とすれば戴説はそれを承けたものであることになる。ただし、本論文は戴震がいかなる態度のもとにいかなる説を立てたかを分析することを主眼としているので、その説が彼が初めて出した説か否かは問題とはならない。

〔付記〕

本論文は、一九九〇、九一兩年度の慶応義塾大学院文学研究科中国文学専攻後期博士課程の講義である近藤光男先生担当の『杲溪詩経補注』研究に参加して得た成果である。近藤先生には本論文作成の課程においても多くの助言と教示とを賜わった。ここに記して感謝の念を表わす次第である。